

源氏物語における時間意識

—— 年始の諸相をめぐって ——

矢 沢 勢 紀 子

序

源氏物語の時の進行は主として四季の運行に拠っている。したがって、この物語に含まれる時間意識を見ようとする場合まず問題になるのは、人物の四季運行への対応の仕方であると言えよう。とりわけ注目されるのが、自ら四季運行の一環をなすのみならず、一年の始まりの時としてその重要な指標となっていると考えられる、年始への対応である。

本稿は、右の見地から、源氏物語の中の年始に着目し、これがいかに意義づけられ実際にはいかに描かれているかを見定めることを通じて、源氏物語が擁する種々の時間意識——それらは作者を含む当時の知識人一般が担っていた時間意識の各典型的な形における反映であると考えられる、ただしそのいずれが強調されるかには作者の個性も関わってこよう——の様態を明らかにし、さらに、それらが総体として上古以来の時間意識の変遷過程上いかなる一時期を画

するかを、従来の研究や、源氏物語前後の物語・日記等を参看しつつ、考究しようとするものである。

論をすすめるにあたっては、二つの階梯を設ける。はじめに、源氏物語において、年始を意義づけるものとして、いかなる特徴的契機が期待されているかということを確かめる。ここで、それらの契機が、その背後にある時間意識ともども、上古以来の系譜を引いていることが確認されるであろう。この前提的考察をふまえ、次に、各年始が実際にはどのような様相を呈しているかを、年次交替を示す表現を手がかりとして、見てゆく。この段階では、既出の時間意識の他に、源氏物語を——そして栄華物語をも同様に——特徴づけている、その時代に顕著な時間意識が確かめられるであろう。

右のような手続きにより源氏物語に含まれた各種の時間意識の様態を照明し考察を加えることは、筆者の当面の課題、すなわち、中古文学における時間意識の闡明およびその思想的意義づけということを果たして行く上で、抜きがたい試みであると言える。

一、年始の意義

かつて平野仁啓氏は、日本人の時間意識に関する論究において、万葉集の時代から古今集の時代にかけて循環する時間から直進する時間への移行が見られると論断され、その論証の途上、『古今集』には新年のよろこびは歌われていない」と述べられた。⁽¹⁾各時代が、はたしてそれほどに、ある特定の時間意識に支配され尽くすものかどうかという疑問もさることながら、この新年に関する論述は、些かの補説を要しよう。というのは、

ときはなる松のみどりも春くれば

今ひとしほの色まさりけり (春歌上)

春くればやどにまづさく梅花

きみがちとせのかざしとぞみる (賀歌)

古今集所載のこれらの歌には初春ゆえの慶祝の意が明らかに読みとれようし、また、

あたらしき年の始にかくしこそ

ちとせをかねてたのしきをつめ (大歌所御歌)

が伝誦に基づくからといって、これが古今集に採録されていることの意義を等閑視してはなるまい。⁽²⁾古今集にも、少なくとも年始のよろこびは認め得るのであり、平野氏の論述は、年始が新年なるが故に——再始・改新の時であるが故に殊更によるこばれる状況を想定していると見るべきであらう。

古代日本において年始を年始として他期と異なるべく意義づけていたのは、必ずしも再始改新の契機ばかりではなくて、累積(の)

測定の契機が同じくその任にあたっていたと考えられる。前引の古今集の歌においては、年始が、再度の始まりの時、万事の改まりの時としてよりは、年が数えられその累積が確かめられる時として認識されていると言えよう。二つの契機が同時に語られる例は、早くも万葉集に見えている。

冬過ぎて春し来れば年月は新なれども

人は舊りゆく (巻十)

古今集、そしてその約一世紀後の拾遺集にも、同工異曲ともいうべき歌が採られている。

もうちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども

我ぞふりゆく (古今集・春歌上)

あたらしき年はくれともいたつらに

わか身のみ社ふりまさりけれ (拾遺集・雑春)

ここに見る限り、人は旧りゆく——我ぞふりゆく——わが身のみこそふりまさりけれ——と、時代が下るにつれ年始における老齡の自覚は切実さを増して、⁽³⁾再始改新よりは累積測定についての関心の度合が次第に高まって行つたと推測されるものの、二つの契機は上古・中古を通じて共存していると言える。

そして源氏物語が有する年始観も、そのことを証するものである。まず、年始が本来再始改新の時であるという認識は、「いにしへの例にならずへて、白馬ひき」(乙女三二六)、「年のはじめの榮えに、見たてまつる」(初音三七八)、「みがき改めたる御よそひに」(薄雲二二三)、「あらたまれるころの曇りなきに」(若菜下三四一)などの尋常なる年始風景の点描にうかがわれる。特に、年始が

物事すべての改まりの時と見なされていたことが、次のような叙述に明らかである。

御心ひとつは、悲しさのあらたまるべくもあらぬに、殿には、例のやうに、人／＼まゐり給ひなどすれど、……(幻一九五)
「今年だに、聲すこし聞かせ給へかし。待たるゝ物は、さしおかれて、御氣色の改まらんなん、ゆかしき」との給へば、「さへづる春は」と、辛うじて、わな／＼かし出でたり。(末摘花二六六)

また、年始が累積測定の時として認識されていることを知るには、右の末摘花の返答を待つまでもない。年始に際して人間の成長や老熟が言われる例は、「今日よりは、おとなしくなり給へりや」(紅葉賀二七八)、「御年の數そふしるし」(同二七九)、「人より殊にかぞへとり給ひける、今日の子の日」(若菜上二四二)、「ねびまさり給ひにけり」(若菜下三四一)、「年まさり給へる」(浮舟二〇四)、「君がためにぞ年もつむべき」(手習四〇三)等々、極めて多い。中に、「新しき年ともいはず」(葵三六二)、「改まるしるしもなく」(賢木四〇三)と、事実上改新の気分が失われた年始においてなお、「御年の加はるけにや」(葵三六三)、「こよなう、およづけて」(同)、「類なく、ねびまさり給ふ」(賢木四〇四)などと人の成熟が言われる場合があることは注目要する。

再始改新と累積測定——源氏物語においても、年始はこの二様の契機に意義づけられており、殊に後者への関心は著しい。源氏物語の年始観は、日本古来の年始の認識の仕方の系譜に連なっていると見てよからう。

ところで、上述のような年始の意義は、いかなる時間意識と提携しているだろうか。再始改新の契機について言うならば、そのうち再始ということは、いわゆる循環する時間と関わりを持つであろう。源氏物語においても、前引の例に見る限り再始よりは変改更新の要素——むしろ時間の不可逆的進行と関わりの深い——が濃厚であるとはいえ、時間が循環するという意識は存すると考えられる。「行めぐり、今日はその世に逢ふ心地して」(賢木三九九)、「い／＼かへりゆきか、秋を過ぐしつゝ」(松風一九九)などの叙述がその傍証となる。また、累積測定の場合は、年始を、直進する不可逆の時間を目盛る指標として性格づけるものであり、源氏物語に頻見する「年〔齡、老い〕のつもり」という言葉や、「とり返すべきにもあらぬ月日」(若菜上二三六)、「さかさまに行かぬ年月」(若菜下四一五)などの発言は、これに呼応していると言えよう。

古来年始を意義づけてきた二つの契機に看取される如上の二様の時間意識が、源氏物語においてなお濃厚であることは否定できない。次節の年次交替表現をめぐる考察は、その点について新たな論拠を提供するとともに、源氏物語を特徴づける、もう一種の時間意識を浮き彫りにするであろう。

二、年始の諸相に見る各種の時間意識 ——年次交替表現に即して——

源氏物語において、上述の意義を備えた尋常にめだたい年始が描かれる一方、年始本来の意義の失われた「悲しさのあらたまるべくもあらぬ」状況が示されていることは、先にも触れた。そして、そ

うした尋常ならざる年始の背景に、決まって近親者との死別があることは留意されてよい。めでたかるべき年始が喜ばれないという図式は必ずしもこの物語特有のものではないが、これほど年始の景況の明暗が鮮烈な対照をなす例としては、他に栄華物語があるのみで、栄華物語も同様に、死に覆われた幾つかの年始を持つ。

さて、このように多様な年始のあり方を類別整理し時間意識の解明の手だてとする上で、有力な手がかりとなるのは、年次交替の表現である。旧年から新年への年次交替がいかに表記されるかということから、個々の年始にこめられた意味を汲むことが可能なのではないか。年始の記事は無くても年次交替の表示のみある例が源氏物語に多いという事実も、そのような方法を要請するものである。次に、直接・間接を問わず、年次交替を示していると考えられる記述を列記しよう。

源氏年⁽⁵⁾齡 年次交替を示す記述

卷

- 一九 晦日の日：朔日のほど過ぎて
 - 一九 晦日には：朝拜に参り給ふとて
 - 〇二二 年もかへりぬ
 - 〇二四 年かへりぬれど
 - 二五 年もかはりぬれば
 - 〇二七 年かへりて
 - 二八 年變りぬ
 - 二九 明くる年の二月に
- 末摘花△
紅葉賀△
葵▲
賢木△
賢木△
須磨
明石
濡標

- 二九 年かはりぬ
- 〇三二 年もかへりぬ
- 三三 年かはりて
- 三四 年の暮には：一日にも
- 〇三五 年かへりては
- 〇三六 年たちかへる
- 〇三七 年返りて
- 〇三八 年かへりて
- 〇四〇 年もかへりぬ
- 〇四一 年返りぬ
- 〇四七 年返りぬ
- 〇四八 年もかへりぬ
- ×五二 春の光を見給ふにつけても

- 蓬生
薄雲▲
乙女
乙女△
初音▲
行幸
真木柱▲
若菜上▲
若菜下
柏木
幻△

薫年齡

- 一六 む月の朔日ごろ
- 〇一七 その年かへりて
- 二〇 十九になり給ふ年：賭弓の還鑒のまうけ
- 二四 年かはりぬれば
- ×二五 春の光を見給ふにつけても
- 二五 その年は變りぬ
- 二六 年も暮ぬ。む月の晦日がたより
- 二七 睦月の朔日過ぎたるころ
- 〇二八 年も返りぬ

- 竹河
竹河▲
匂宮▲
椎本
早蕨△
宿木
宿木
浮舟▲
手習

なお、右はいずれも地の文から拾ったものである。この他、年末年始における会話や書簡の中に、「年は變りなむとす」(椎本三六六)、「年改まりて」(早蕨一一、浮舟二〇六)などが見える。

年次交替が端的に示される場合、「年(たち)返る」(○)という表現が大半を占め、「年変る」(●)がこれに続く。他に、「春の光を見給ふにつけても」(×)という間接的な言い方が二例見えており、注目される。以下、「年返る」、「年変る」、「春の光を」の各表現に即して、考察をすすめる。

(1) 年返る

「年返る」は、万葉集の時代以来の、新旧年の交替を表わす際の常套句である。中古に入っても、物語や日記に年次交替が端的に記される場合、多くはこの表現が用いられる。

	落窪物語	宇津保物語	源氏物語	夜の寝覚	狭衣物語	蜻蛉日記	更級日記	栄華物語
年(たち)返る	5*	9**	14(1)	3	4	5(1)	5***	22(1)
年変る		2	7					7
年越ゆ		1				2		
…年になる								25

*このうち二例は「帰る」と表記されている。

**うち二例は「かへる年」である。

***うち二例は「かへる年」である。

ゆえに、源氏物語における「年返る」の多用は当然であって、それらは年次交替を機械的に示す符号に過ぎないと見ることもできよう。しかしながら、「年返る」という表現自体が、時間の再生が年次交替によってもたらされるという認識の一表象としてあると解釈することも可能なのではなからうか。そう見る場合、そこに導かれる年始は、まさに再始の時として意義づけられているということになる。

事実、源氏物語の中の「年返る」の用例は、右のような解釈を根拠づけるものである。すなわち、この表現に導かれる年始には、ある共通の特色を認め得るのであって、それは、恒例の年始儀礼の記載を伴いやすいということである。「年返る」が順接の形で年始の描述を導く一〇例のうち六例において、行事典礼が言及されており――源氏(三二年(七草)、三六年(歯固め、臨時客、参賀、男踏歌、後宴)、三八年(男踏歌)、四〇年(供若菜)、薰一七年(男踏歌)、源氏二二年については後述――、しかもそのいずれもが、事の次第やその場の雰囲気詳しく伝えて(▲)いる。「年返る」に導かれない年始においても儀礼の記載はあるものの、その殆どは、行事の名をあげるに止まり(△)、例外としては、僅かに薰二〇年(賭弓)、二七年(卯槌)があるばかりである。

「年返る」と年始儀礼の遵守との関わりを示して特に注目に値す

るのは、源氏二年の年始である。ここには、新年ゆえに、昨秋の葵上の死による悲嘆を「念じかへし」(葵三六三)、「思ひ給へ忍」

(同) んで、「かはらず」(同)、「例のやうに」(同)あくまで型通り年始の儀礼に循おうとする遺族の姿が描かれている。葵上の母が調えた「昔にならひ侍りにける御裳」(葵三六三)を身につけ、源氏は「あまた年今日あらためし色ごろも」(同三六四)と詠む。少なくとも表向きには、「昔」、従来の「あまた年」の年始と毫も変わらぬ状況が再現されているのである。この源氏二年の年始においては、「新しき年ともいはず」(葵三六二、三六四)故人が偲ばれているとはいえ、他の幾つかの年始の如くに年始自体が悲嘆によって葬り去られるようなことはなく、むしろ年始の意義を重んじて「例のやうに」「昔にならひ」儀礼が果たされようとしており、その事は「年かへりぬ」という表現と照応していると言えるのではなからうか。

「年返る」という年次交替表現が定例の年始儀礼の遂行と強い関連を持つことは、榮華物語において一層明白である。榮華物語が有する種々の年次交替表現のうち、「年返る」の用例を検討してみると、これらが、他の表現に比してはるかに頻繁に、年始の行事典礼が通例どおりであるという内容の記述と結びついていることに気づく。すなわち、総て二二例の「年返る」の用例のうち九例が、次のような記載を伴っている。

世の有様常のやうなり。(卷八、寛弘六年)

よろづ例の有様にて過ぎもて行くに、…(卷八、寛弘八年)

正二月例の世の有様にて過ぎもて行く。(卷十二、長和四年)

正二月は例の有様にて過ぎもて行くに、…(卷十二、寛仁元年)例の事騒しくて過ぎぬ。(卷三十一、長元六年)

ついたちの有様など、例の事なり。…内の女房かねて参り居て、御饌参りなど例の儀式なり。拜し奉らせ給程など、見る人常の事なれど涙こぼれてめでたくいみじ。(卷三十二、長元七年)

例の作法にて過ぎぬ。(卷三十七、康平六年)

例の作法にて過ぎゆく。(卷三十七、治暦三年)

内邊り例の事にて、御まかなぬ、御樂など参る有様、めでたく華やかなり。(卷四十、寛治二年)

しかも、類同の記述で「年返る」という年次交替表現に導かれなものは六例あるが、そのうち二例(永観元年、永祚元年)は「年号かはりて…年といふ」と改元の表示によって年始を告げる場合で、「年返る」などの表示は当然不要であるし、また他の二例(寛徳二年、天喜二年)は「ついたちの」と元日の有様がいきなり語り出される場合で、ここでは「年返る」が省略されていると見ることも可能であろう。また、寛仁二年の例は、三条院崩御の翌春の記事として、

よろづもの榮華なくおはします年なれば、例参り給ふ上達部など、臨時客など常の如し。されど女房などの出で入りもなく、ひきいりたる御有様は口惜しくぞ。(卷十三)

とあるもので、ここで強調されているのは、参賀が尋常に行なわれたことよりは摂関家の様子が常ならざることであると見るべきであり、この年始が「年返る」で始められていないのは当然であると言

えよう。したがって、残りの一例、

寛弘三年になりぬ。今年は大殿御嶽精進させ給べき御年にて、正月より御歩きなど心とけてもなければ、次／＼例の作法にて過ぎもてゆく。(巻八)

を唯一の例外として、「例の」、「常の」云々の記述は、各年次交替表現のうち「年返る」と特別の対応関係を持つことになる。

以上より、榮華物語において、「年返る」という表現が、年始儀礼の例年通りの遂行ということと密接に関わっていることが知られる。時代はやや遡るが、源氏物語における「年返る」一般にも、同様の事情を認めることが許されるのではないだろうか。

源氏物語の年次交替の表示において「年返る」が多用されているのは、これが上古以来の常套句であることに拠るだろうが、その幾何かは確かに、年始儀礼の履行という意を含むことが、これまでの考察から明らかであろう。したがって、この表現がいかなる年始観と結んでいるかといえば、年次交替によって一切が再び、従来の年始における形をとる、出発点に文字通り返る——つまり、再始の時としての年始が、そこには認められよう。さらに、そのような年始毎に恒例の行事が繰り返され、過去が再現・反復されるのであるから、時間意識の観点からいうならば、「年返る」という年次交替表現の背後には、年始を基点とする時間の循環があると結論づけることができる。

(2) 年変る

次いで問題になるのは、「年変る」という表現である。これは、

宇津保物語に二例を数えるものの⁽⁹⁾、ほぼ源氏物語と榮華物語特有の表現であり、その時代の年始観の一端を反映していると考えられる。「年変る」は「年返る」の単なる言い換えではなからう。

「年変る」という年次交替表現でその開始が告げられているのは、源氏二五年、二八年、二九年(蓬生)、三三年、薰二四年、二五年(宿木)の各年である。これらの年は、いかなる共通性において、他とは異なる始まり方を必要としているのだろうか。

まず言えるのは、その多くが除喪と関わっていることである。源氏二五年は、故桐壺院(二三年没)の諒闇明けの年であり、また三三年には藤壺の喪が、薰二五年には当帝の女二宮の母女御の喪が明けている。最初の例においては、

年もかはりぬれば、内裏わたり、花やかに、内宴、踏歌など、
：(賢木四〇三)

と、「年変る」の表示が、前年の「今めかしき事なく、静か」(賢木三七九)なる年始とはうってかわった、解放感あふれる年始の描述——尤もこれは藤壺の「物のみあはれ」(同四〇三)なる心境への導入に過ぎないのだが——を導く。また後の二例においては、

年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、世の中、色あらたまりて、
：(乙女二七三)

されど、その年は變りぬ。女二の宮も、御服果てぬれば、いとど、何事にかは憚り給はむ。(宿木四〇)

と、「年変る」という年次交替の指示がそのまま、一年の服喪期間の終焉(それぞれ三月、夏頃)の叙述へとつながっている。年次交替の表示が除喪を示唆する場合には必ず、このように「年変る」と

いう表現が用いられている。

また、薫二四年の場合、その年始の時点では大君と中君は未だ故八宮の喪に服しているにもかかわらず、

年かはりぬれば、空の氣色、うらゝかなるに、汀の水解けわたるを、…（（椎本三七三）

と、「風の音も荒らか」（（椎本三六五））に「雪も、いと所せき」（（同三六七））荒涼とした前年の暮れの風景が、新春らしいそれへと一変している。これは、年末における女房達の、

「あはれ、年は變りなむとす」「心ほそく、悲しきことを」「あらたまるべき春、待ち出でゝしがな」（（椎本三六六）

という、来たるべき春に心境の一転を期する発言に應ずるものであることは自明であつて、これら「心を消た」ざる発言を「かたきことかな」（（同））と聞く姫達にとつては、決して「年かは」つてはいなかつた——源氏二五年の藤壺における如くに——のではない。事実、女房達が春の芹・蔵を賞して「行きかふ月日のしるしも見ゆるこそ、をかしけれ」（（椎本三七三））と言うのを、姫達は「なにのをかしきならむ」と聞き、八宮が存命していたならば「知られやせまし春のしるしも」（（同））と詠むのである。要するに、薫二四年の「年変る」の用例は、二三年末のそれと共に、八宮邸の女房達の、「あらたまるべき春」に託された、心情の上での除喪と関わっていることと見なすことができる。

以上から推すに、除喪のように、旧年から新年にかけて世上ないしは心理上の状況が一変する際に、「年変る」という年次交替表現が使用されやすいのではなからうか。そのような仮説に立つ時、源

氏二八年の用例は、これにひき続き述べられる同年七月の帰京の裁許——源氏の足かけ三年にわたる流謫生活に終止符をうつ——によつて、また二九年の用例は、やはりその直後に述べられる源氏の末摘花再訪——長年の無音による末摘花の不幸と貧窮を一挙に償う——によつて、説明づけることができる。

ところで、榮華物語における「年変る」の用例を参看すると、先の薫二四年の用例に通うものが目立つ。すなわち、喪中でありながら、新年の到来による状況の一新が言われる場合で、七例のうち少なくとも四例がこれにあたる。それぞれ、関白兼通、伊周母、後一条天皇ならびに中宮威子、敦文親王（白河第一皇子）の他界の翌年のことであり、次のように記されている。

かくて年もかはりぬ。左の大臣の御さまいとくめでたし。
（（卷二、天元元年）

かくて年もかはりぬれば、一日は朝拜などして、（萬目出度すぎもていくに、花の都は）目出に、…（（卷五、長徳三年）

年かはりぬれば、内邊り華やかに今めかしう、御榮参り、御まかなひなど、三日の程いとめでたし。（（卷三十四、長暦元年）

年かはりて御戴餅の折も、…（（卷三十九、承暦二年）

めでたい年始儀礼は、喪に閉ざされた前年の暗い景況を一転するかのようである。ただし、ここでも、すべての人間にとつて年が「かは」つて慶祝の気分の中に悲嘆が解消されているわけではなく、むしろ、容赦なく「かは」る年を是認できない遺族の心中が強くうちだされている。長徳三年の春、伊周兄弟が「哀に年さへだよりぬるを、よろづいとおぼつかなく」感ずるのは、配流の身ゆえの嘆

きに、母との死別の悲しみを重ねてのことであろう。また、長暦元年の前年の大晦日に詠まれた故中宮を悼む贈答歌、中でも、
あたらしき年に添へても變らねば⁽¹²⁾

戀ふる心ぞ形見なりなる (卷三十三)

によれば、「年かは」つての慶祝の雰囲気にとけこめぬ人々があったことは確かである。承暦二年の場合も、

若宮の御事を盡きせずおぼし歎かせ給ける。年かはりて御戴餅の折も、こと忌せさせ給はず、いみじき御心のうちなり。

とあり、ここではむしろ遺族の尽きせぬ悲嘆が前面に出ている。こう見てくると、栄華物語においても、「年変る」という年次交替表現は、旧年から新年への状況の一変を示しているが、その場合、源氏二五年や薫二四年と同様に、そうした変転がかえって変転せざるものの存在を際立たせていることに留意すべきであろう。

源氏物語の時代を俟って顯著になった「年変る」という表現が、従来の「年返る」の単なる言いかえでないことは、既に瞭然であらう。「年返る」が再始・反復を示唆するのに対して、「年変る」は、多くは除喪や、新年故の喪の悲しみの払拭と関わりつつ、年次交替を機とする、世上の状況や世の人心の、改新・転変を示唆している。源氏物語および栄華物語に関する限り、喪中の年始が「年返る」に導かれる例が殆ど無いということも、ここで考え併せられよう。

「年変る」という表現の右のような含意からすれば、この表現の背後には、直進する時間——常に移り変わり流れゆく不可逆の時間——という意味での——が控えていると判断してよからう。加えて、源

氏二五年、薫二四年、また栄華物語の幾つかの「年変る」の用例は、循環する時間でも直進する時間でもない、それらとは異質の時間意識を孕んでいると考えられる。これを解明する手がかりとなるのが、源氏物語における第三種の年次交替表現、「春の光を見」という言い方である。

(3) 春の光を見給ふにつけても

「春の光を見給ふ」と間接的に年次交替を示す言い方は、源氏五二年と薫二五年(早蕨)の冒頭に見えている。

春の光を見給ふにつけても、いとど、くれ惑ひたるやうにのみ、御心ひとつは、悲しさのあらたまるべくもあらぬに、殿には、例のやうに、人／＼まゐり給ひなどすれど、御心地なやましきさまに、もてなし給ひて、御簾のうちにのみおはします。

(幻一九五)

歎しわかねば、春の光を見給ふにつけても、「いかで、かく、ながらへにける月日ならむ」と、夢のやうにのみ、おぼえ給ふ。(早蕨一一)

双方とも、最も身近な者(紫上、大君)と死別して後、初めての春を迎えた人間(源氏、中君)の、沈痛な心境を描いている。しかも、悲嘆にくれているのは彼らばかりではない。長年仕えた女房達は、「かなしさも改めがたく、思ひさますべき世なく」(幻一九五)紫上を慕い続けており、また、懸想人薫は、大君に「盡きせず思ひはれ給ひて、新しき年ともいはず、いや目になむ、なり給へる」(早蕨二三)という有様である。恒例の年始饗礼が「御簾のうち

に」回避され、悲嘆を「改めがたく」、「新しき年」ゆえの事思ふも為されないこれらの年始においては、本来の再始改新の意義は失われていると言ふべきであり、ここで「年返る」や「年変る」などの表現による年次交替の表示がさし控えられているのは、当然であらう。

暦の上での新年の到来は、心理状況の如何により拒まれ得るが、自然界の現実としての春の訪れは、「藪しわかねば」そうはゆくまい——「春の光を見給ふ」という言い方は抑もこのような認識に立つのではないか。「春の光」がここで起用されるのは、これが、主要人物において既に失われている外界の時間経過への注意を、僅かながらも喚起し得るからであると考えられる。中君は、「明け暮も知らず、惑」（早蕨一一）い続けるうちに辛うじて「春の光」に触れ、月日の経過を悟るのである。「春の光を見給ふにつけても」という表示は、したがって、外界の時間経過への関心が極度に薄れた状況を前提としていえると言えよう。冷泉帝の、「さるべき御かげどもに、おくれ侍りて後、春のけちめも思う給へ分れぬを」（乙女三一九）という追懷や、皇后定子の崩御に関する榮華物語の「春の来る事も知られ給はず」（巻七、長保三年）という記述において、近親者の死による計時能力の全き喪失が、春の到来の不可知という形で表わされていることが、思い併せられる。

近親者との死別による深い悲嘆は、人間の外界の時間経過への関心を奪い、そこに、春の感知さえ問われるような状況がもたらされる。その場合、新年はもはや、人間の心理状態に変化を及ぼし得るものではなく、周囲の景況が年次交替につれて一変すればそれだ

け、変わらぬ心境が際だつことになる。ここで、外界の転変の相が注目されれば、「年変る」という年次交替表現が用いられ——前項に掲げた、変転せざるものを含む年始を想起されたい——、変化のない内心の様が注視されれば、年次交替は「春の光を見給ふにつけても」などの形で暗示されるに止まると見るべきであらう。

さて、近親者との死別の悲しみに覆われた年始の背後には、いかなる時間意識が控えているだろうか。「思ひさますべき世なく」、「盡きせず思ひはれ給ひて」、「盡きせずおぼし歎かせ給ひける」（承暦二年）などの叙述は、過去をひきずり、同一の状態を保ち続ける心の有様を強調している。ここでは過去は、再現されるのではなく、一回性のものとして追逐されるのでもなく、そのまま現在へと浸透しこれを支配するのである。時間の循環や直進にかわって、持続ということを、そこに認め得るのではあるまいか。

「春の光を見給ふにつけても」という間接的な年次交替表現は、年が「返る」とか「変る」とかの觀念を容れぬ内心の有様を反映しており、循環し、また変転を含みつつ容赦なく直進する外界の時間とは異質な、持続する内心の時間を担っていると考えることができる。少なくとも年次交替の表現形態および年始の様相に関して見る限り、源氏物語は、自然や年中行事の反復と関わりの深い循環する時間、移り変わる人世と関わりの深い直進する時間のほかに、人間の心理と関わりの深い持続する時間という時間意識を保有していると言えよう。

結語

以上の時間意識の抽出作業の結果、思想史の観点から注目し得る事象として、次の二つがあげられる。すなわち、源氏物語の時代においてなお循環する時間の意識が存続していること、および、從來、存在はしても特に年始に関しては稀薄であったと見られる持続する時間という時間意識が、この時代に至って表面化していることである。前者は、平野氏の論断への当初の疑問を根拠づけるものである。直進する時間は循環する時間を排し去るものではなく、上古から中古にかけて、時間意識はその比重を移したに過ぎないと考えられる。また、後者は、持続する時間の顕在化により、源氏物語の時代が、時間意識の変遷過程上、一つの時期を画することを予想させる。持続する時間——過去をひきずる時間は、当時の人々の時間意識を大きく特徴づけるものであって、この時代の人心を強力に支配していた宿世の觀念も、ある面でこれと関わりを持つと筆者は観ている。その点については、他日稿を改めよう。

なお、本稿は、考察の主たる対象を源氏物語としながらも、栄華物語に参看するところが多く、これが時間意識に関して源氏物語と多くの共通点を持つことを確認し得た。ただし、たとえば「三年になる」という新規の年次交替表現は、栄華物語の歴史物語たる所以でもあろうが、その時間意識が源氏物語のそれには薄かった要素を含むことを示唆していよう。しかしその検証はもとより本稿の任ではないので、ここでは、右の表現については、累積測定の契機が関与していることを想定するに止めておく。

註

(1) 「日本人の時間意識の展開——古代から中世へ——」(明治大学文学部紀要「文芸研究」二二)。引用は、三三頁。

(2) この歌の付記に「日本記」には、つかへまつらめ万代までに」とある通り、続日本紀の天平十四年正月十六日の記載とは下句を異にしており、むしろ古今集の句の文が歎楽の趣きは強い。

(3) この点に関して、田中元氏に、古今集における老いの嘆きへの注目がある。『古代日本人の時間意識——その構造と展開——』一八七頁。

(4) 源氏物語の年次交替に関しては、国文学の視野からの論究が既に幾つかある。たとえば、大朝雄二氏の「源氏物語の方法についての試論——時間的秩序をめぐって——」(藤女子大学国文学雑誌二)は叙述の方法の視点から、また、平井仁子氏の「としかへりぬ」など——「源氏物語」の場合——(実践国文学七)は年立研究の立場から、それぞれ「年末年始の記述」、「年の変わり目」について論じて詳しい。ただし、これらの論究はその性格上、いずれも、年次交替の表記に、一様に年次の累積を認めるに止まり、個々の表現に含まれる年次交替のさまざまな意味については触れていない。

(5) 岩波古典文学大系の『源氏物語』(山岸徳平氏校注)に記された光源氏の年齢に従う。薫の年齢についても同様である。

(6) 岩波古典大系『源氏物語』の校異によれば、不忍文庫本(屋

代弘賢校訂)には「年かはりぬ」と記されているという。しかし他の諸本はいずれも「年かはりぬ」であり、不忍文庫本の表記に特別の信憑性を認める謂もないので、ここでは「年かはりぬ」を取る。

(7) 万葉集卷十七に、「あらたまの年かへる、まで相見ねば心もしのに思はゆるかも」とある。

(8) 特に原始心性においてこのような認識が著しいと言われる。M・エリアーデ『永遠回帰の神話―祖型と反復―』第二章、時間の再生。また、『聖なる空間と時間』(エリアーデ著作集三)第十一章、聖なる時間と永遠再始の神話。特に、二〇二―一〇六頁。

(9) 岩波古典大系『宇津保物語』(河野多麻氏校注)によれば、藤原の君巻とあて宮巻に各一例見える。ただし、これらは流布本系の諸本には全く記載が無く、主に九大本系の異本に見えているのを、九大本を善本とする河野氏が補記されたものである。文化年間細井貞雄の再三の校訂に成った九大本系の諸本が、鎌倉末期までは確かに存した原本に近い宇津保物語を最もよく反映する善本であるとの仮説についての論証は、氏の「うつは物語異本の研究」(共立女子大学紀要二)に詳しく、これを反証するに足る論拠を筆者は持たない。しかし河野氏自身も認めておられるように、九大本は板本への校合書き入れに過ぎずそのもとなった写本は現存しないなど、九大本の成立事情についてはなお疑点を残しており、少なくとも、この「年変る」の用例――源氏物語などの用例とは異

なり、これが「年返る」の替りに起用される必然性を認め得ない――が原宇津保物語の表記をそのままに伝えているものは依然不明であると言える。したがって、ここでは、これら二例の「年変る」の用例に関しては、源氏物語が、「年変る」という年次交替表現について、あるいはその先蹤を持つかもしれないことを認めるに止めよう。

(10) 他に、貞元元年(巻二)の例も喪中であり、特に状況の一新は語られないものの、これに加えてもよからう。

(11) 岩波古典大系『榮華物語』(松村博司氏・山中裕氏校注)の表記のまま。底本における補句である。

(12) 同前書の表記のまま。ただし見せ消ちによって「なりける」と補正されているという。

(13) 他の例に関して言えば、承保四年(巻三十九)の場合は、「所くの有様、常よりもめでたう見ゆる」とあって、前引の長暦元年に「例、の作法よりもめでたし」とあるのと通じており、これもめでたさの強調によって状況の変化を示唆しているのではないか。また寛治三年(巻四十)の場合も、二条院が初めて山里に迎えた新年を、「都に變りたる春のけしきもあはれ」と描いている。

(14) 源氏二四年は桐壺院崩御の翌年で諒闇であるが、「年かはりぬれど」と逆接の形をとっている。したがって、先述の源氏二三年の例が唯一の例外である。

〔付記〕

本稿の引用は、拾遺集(未刊国文古注釈大系五)を除き、すべて岩波古典文学大系による。